

A photograph of a pond with a reflection of a tree and sky in the water. The water is a deep blue, and the reflection is clear and detailed, showing the green leaves and brown branches of the tree. The sky is a pale blue with some white clouds. The overall scene is peaceful and serene.

ねずみ魚

(下)

カナタ・ムメイ

そのようなことをこの初診の男は経験しておらず、それでいて彼女を油揚げを搔っさらう鴉のごとく手にしようとしているのである。だとするならば、少々手荒な真似をして、この憎たらしい鴉を退治しなくてはならない。

だから、こいつには、鴉というあだ名をつけることにする。その鴉はくちばしを入れてきた。それで、殴りつけるわけにもいかず・・・どうにかして・・・

初診の男は退散した。しかし後日、こいつは必ずくるにちがいない、それに彼女が休診札を取ってしまい、診察を行うこともありえるわけであり、それを妨害することなど一回なら、ともかくも、そうたびたびできるわけもなく、それに俺も神経が参ってしまう。それならば、彼女を信頼するしかないと考えた。

彼女は、そのようなことは全く知らないわけで、そもそもそれを知る、知らせようとは思わないが、帰ってきた。紙袋いっぱいにして。彼女は冷蔵庫に向かっていき、冷えたミネラルウォーターをごくごくと音を立てて飲み、

「これ飲む？外すごく暑いよ、まるで息しないで潜水するようね」と息を切らせながら言った。

「この前きみをいやらしい目で見ていた男が来たんだ、でも俺はこう言ってはなんだがね、追い出した」

「ひょっとして、やきもち焼いたの？」と、からかった。

「そうともとれるね、そうさ、やきもち焼いた…正直に言う」

(その時俺はあの八百屋の男を思い浮かべた。すぐに消えた…)

「大丈夫よ、問診表の電話で呼んでみるから」

俺は彼女とあの男が電話で話しを、たとえ事務的な話であってもしてしまう、このことが燻っていた嫉妬を、わんさか燃えさせ、炎は強まった。まるで、初診の男が彼女の耳元で囁くように感じた。

電話という奴はどうも昔から気に食わなかった。耳という繊細な膜でできている器官を互いに電話機を介在させつつも接近させることが、なんとなく関係を持つかのように感じたからだ。もちろん好意があったことだ。何の脈絡もなく、たとえば、俺と親父とか、宝くじ売り場の年増の女とか、小学生の子供とか。そういった関係では、そんな感じは起こらない。

それでも彼女はあの男に電話をした。

事務的なことだから、と思っただけのもの、長く感じ、傍らで咳払いなどをし、かちゃかちゃと小物で、音を立てたり、お茶をずるずると啜ってみたりした。そのたびごとに彼女は困った顔をして、その顔がなおいっそう内密な電話のような気もした。

電話は、もちろん向こうの声は聞こえない。彼女が、「ええ、いつでもかまいません」、「ええ、結構です」と言っただけで、後は、なにやら聞いて笑ったりなどしていた。

そのため、俺はさらに、何かしら音を立てなくてはならないような気がした。音だけで満足のいかないとわかり、彼女の裾を引っ張ったり、脹脛に舌を這わせたりしたので、困った顔が、徐々に怒りを示すような顔になった。

それでは困ると思い、立ち上がり、唇を合わせようとした。すると、彼女はスリッパを履いた足の裏で、俺の弁慶の泣き所を蹴った。痛くはなかったが、じゃれたくて仕方のない犬のようになり、部屋を行ったり来たりした。

そして、彼女の部屋にいき、彼女の枕の匂いをかいだ。そうすると、なぜか鎮静作用があり、おとなしくなった。鼻を思いっきり擦りつけ、匂いを巨大な、ふいごの要領で吸い込みあじわった。

それでも、電話は切れなかった。長いこと話を聞いていたようだ。俺はそんなことは知らずにいつのまにか、彼女のふとんで眠りかけていた。雨が降ってきたようで、電話の声は、艶やかに聞こえた。もちろん彼女の声である。あの初診のばか鴉の電話を通過した電子音ではない。

俺は夢の中を彷徨う、鏡なんて考えたからだろうか、夢のまた夢、さらに…それは一向に覚めない夢であった。

次の朝を迎えると、彼女は、隣で、黒づくめで眠っていた。生きている唇、血がかよう指、しなやかな背中、それだけで興奮させる足。黒という色であっても包まれている身体には色鮮やかな生命が宿っていた。まるで、その色が発散してしまっただけで一大事となることを怖れるかののように、彼女は黒という色を身に纏い、覚醒していない時でさえも気を、神経を使っているかのようだ。

彼女の眼球がくるくる動いた。

「もう、何を考えているのか分かるわ、電話のことでしょう、そのことを朝一番で聞いたかったんでしょ？ねえ、あなたこの前あの人が来たとき意地悪したでしょ、そのこと彼は気にしているようよ、悪いことをしたようだ、別に変な気を起こしてはいないが、あの状態では今度はこっちが疑われてしまうから、出直そう、と思った、って言っていたわ。次からは、姿勢を正して…ハハハ、笑っちゃった…姿勢をですって、姿勢を正して出直そうですって、あなたそんなひどく追い払ったの？」

目をこすって、髪が顔にかかったために手ぐしで後ろに搔きあげて、それを何度も繰り返していた。

「そうとも、追い出した」

「ひどいわね、営業妨害よ」

「今度から気をつけるが、あの鴉は…」

「カラス？」

「ああ、あの鴉は、きみを狙っているんだ。それが分からないかな、俺には、そいつが、はっきりと分かる。自信を持って言える、あいつはきみを狙って、手籠めにしようという顔つきだ」

「そんなにひどく憎むことはないし、それに私のタイプじゃないわ」

そう言い残して、食堂に向かい、冷蔵庫からボトルを取り出し、グラスを二つ用意して、男を呼んだ。テーブルについて、朝の空腹な胃袋を純粋なミネラルウォーターが満たす。

「ね、昨日買って来た服着てみない？似合うと思うわ、そう、探検隊みたい…」と言って、くすくす笑った。「探検隊だって！」

「だって、あなたがどんな趣味かわからないし、私の感性で選んだのよ、どうせなら良い服をと考えて、隣の比較的開けた商店街のビルで買って来たのよ、ブランド物よ、あまり知られていないけど、雑誌にも出ていないけど…」

紙袋をテーブルに置いた。

まずシャツだが、やたらと襟が大きかった、これでは一年もすれば見捨てられてしまうような、一時的な流行を後追いしたようなものであった。それは、色はレモン色で、貝のボタンであり、相当高かったものに見えた。ブランド名を見ようとしたが、彼女が今度はジャケットを出してきた。

ジャケットの色は赤だった。これもまた、伝統的な英国を意識したのか、右に二つポケットがついており、上のポケットにはおそらく懐中時計でも入れておくのであろう、ちなみにボタンは三つであった。

そして、「これはついていたのよ」と言って、お芋のような太いネクタイで、それはもう既に結ばれており、端にはぼっちがあり、それをやたらと大きい襟の裏にもう片方のぼっちが仕込まれていたのであった。そして、水色の短パンで、ウールだそうだ。

「夏場にウールだとは、というのは素人ですって、ウールはよくできているそうよ」

彼女は真面目な顔をしていった。

靴にいたっては、ゴム長を思わせるもので、彼女の話ではこの靴は、ハンターが好んではいているそうよ、という。それは、ソールとつま先がベージュで、滑り止めのために出っ張った線が何本か走っていた。そして、それ以外は黒で、ゴムでできているのだった。そのベージュがなければ、ゴム長に鳩目をつけ紐結びにしたように見える。

げんなりしてしまった。色彩感覚はないが、全体を見ると、変なルパン三世に見えた。

「さあ、着てみて、どんな感じかしら？」

彼女は何ら悪意もなく言った。

そこで、着てみると、ジャケットのサイズだけが、一回りも二回りも小さいために、ボタンをつけることができなかった。無理やり留めようとする、ボタンから放射状に皺が広がり、腹が締め付けられる感じがした。

ズボンは丈があってないらしく、ひざ頭が出て、ホットパンツを思わせるものであり、どうやら、ジャケットに問題があるようで、ジャケットの裾が長いため、ズボンが見えず、穿いていないようにみえる。

「きみ、これはジャケットが長いように感じるんだが、ひどく可笑しく見えないか？」

「そうかしら、でも、…」といって例の靴を手渡すのである。

そこで、履いてみるのだが、どう見ても変だ。

「ボタンをとってしまえば、前から見たかぎりでは、ズボンを穿いているように見えるわ」

「後ろはどうなのか」

「そうね、でも…後ろから見て、可笑いな、と思ったら、その人はきっと前から見るでしょ、だから…やっぱりズボンを穿いている、って思うと私は考えるけど…」

「鏡で全体を見てみたい」

「洗面台に鏡があるけど、無駄だと思う」

洗面台に向かった。

「ね、意味をなさないでしょ」

その洗面台の鏡では下半身を見るためには背伸びをしなくてはならず、そうすると手前の台が視界を邪魔してしまい、結局、全身を見るができなかった。それに爪先立ちをするため、鏡の中の映りが、非常に不安定になるのである。

例の靴にいたっては、そこから伸びる足で、きっと人様は笑うだろうと思い、それとズボンと上はもう想像するのも嫌になるくらいであった。

「仕方ない、あきらめよう」

「そんな変じゃないわ。それに、服にうるさい男の人っていうのもねえ…」

「わかったよ、でも、うるさい以前の問題じゃないかと思うけれど」

俺はしばらくその服を着て、靴を履き、居間と食堂を歩き回った。慣れで、違和感をなくしてしまおうとした。だが、いつまでたっても、なじめなかった。

「朝食をとろうではないか」

彼女はメロンパンを二つと、アイ스티ーを冷蔵庫から出してきた。

「昨日買ってきた物よ」と言って渡す。

俺はメロンパンが好物なので、

「これ、俺の好物だ」と言ってかぶりついた。

あんこが入っていた。これではメロンパンではない。そこで、彼女にメロンパンを買うときは、あんこの入っていないもので、表面に風味を蓄えたものが正道だ、と説いた。

「結構、うるさいのね」

「メロンパンについては少々うるさいのだ、カレーパンならもっとうるさい」

彼女と交わることは、めっきり少なくなった。モミジマークの性欲。すっかり彼女との間に枯葉が舞散る木枯らし一番がいつの間にやら生じたようだ。そのことについて俺はそんなに気に止めていないという、嘘になってしまうが、気にしているか、と問われれば、せいぜい標本の蝶ぐらいに俺を扱っているといったことが時たま顔を出す。

ラジオを聞いていた。これは電池で動く。蚊取り線香は不要だ。聞いたことのない町からの生中継、魚屋が出ていた。アジが百円だよー。ネズミ魚の記憶が再び現れる。

俺も数が増えていき、それが食用ともなれば、このアジのように売りさばかれ、時間が来れば破棄されるか、しょつたるの原材料にでもなってしまうのだろうか、なんだか仲間が売られている気がしてくる。

魚屋が嫌いになってきた。局を変えてみた。携帯用のラジオだから、ボリュームを上げるとただ単に喧しいだけになる。音楽だ、演歌ではなく、ポップスだ。彼女は好むのか知らないが、また局を変えた。

そうこうしていくうちに、ラジオのストラップをつかみ、携帯用小型ラジオを振り回した。音が大きくなったり、小さくなったりと目が回るような感覚に襲われる。ラジオの電源を切った。

外はどうなっているのか、雨雲が立ち込めているのか、からっと晴れているのか、梅雨の中休みだろうか、とにかく庭に出た。

あの服を着て出たせいか、少しは人の視線が気になってきた。この庭で少しウォーミングアップをして、町に出てみよう、奇妙ではないだろうか、心配だ。

外に出て、見上げると、晴れ渡って、透き通った紺碧の空であった。彼女と関係をもった芝生の上を飛び降り自殺した現場を見るような、痛ましい感情で眺めてしまう。離れのほうに目をやると、ガラス窓にカーテン、それも厚手の冬の寒い時期にするようなカーテンで窓から中を見ることはできなかった。せめて離れの婆さんが何か評価をしてくれればいいのだが、口が悪いし、俺をとことんこ汚いといっていたから、なんと言われるか分からない。離れはしんと静まり返っていて、中に人の気配がないかのように思われた。足元はサンダルである。靴はいずれこの家から出たとき、たとえば彼女と外食に行くときなどにおろし、それまで部屋で使ってみたらいいだろう、と考えた。どうもあの靴は気に食わない。

犬小屋に近づくと、犬は擦り寄ってきた。そこで頭を撫でてやった。すると、犬は足をペロペロ舐め、俺がしゃがむと飛び掛り、口を舐め始めた。

「おお、これは大変な歓迎だ、なんという名だい？犬種がどうも分からんな、雑種でもないし、おまえさんはどこから来たんだろうか、外国の犬らしいが…先祖はイギリスか、ドイツか、フランスか？」と、男は言って、ああ、俺は外国に行ったことなどなかったな、友人は行ったというが、今年になってしまったら若いときの感動なんてものは無くなるだろうな。俺がもしネズミ魚で研究材料でなく、保存され、水族館にでも行けば、珍魚として外国にでも行けるのかも知れない。そうすれば、諸外国の皆様に出会えるというわけになる。

庭は手入れが行き届いておらず、俺の知っている範囲では、あの離れから少しはなれたところにあるのはエンジュの木であろう。そして、後は柿ノ木、もみじの木、それから低木にいたってはアジサイ、キイチゴの木、ナンテンていどくらいしか分からない。庭としては大きいのだろう。芝生で彼女は精一杯らしい。他の木は、剪定してもらわなければならないだろう。ここで家庭菜園でも開いても面白いだろう、トマト、キュウリ、ナス、シソ、それくらいか思いつかなかった。

そしてその菜園で取れた野菜を彼女と一緒に食べようと男は考え、物置を探し、スコップで耕そう、として物置を見つけると、鍵がかかっていた。そして、男は庭を後にして食堂に行った。テーブルの上に例の靴があった。ハンターがよく履いているそうよ、という彼女の言葉が過ぎる。オランダの木靴を考えるとこれは世界的に普及しているものなのかもしれない。そんな考え方をしてその靴に足を通す。そこで、ラグソックスを履いたほうがまだ見るに堪えるのかもしれない、と思い、彼女が買って来た袋を見ると、ソックスがあった。彼女はすっかりソックスを渡すのを忘れていたらしい。そこで、どうにか格好を取って、誰かいそうな気配を感じる診察室に行き、彼女に物置の鍵をもらおうとした。

診察室に向かうと、彼女が声を堪えているのが聞こえた。そこで、男は恐る恐る診察室のドアをこっそり開けると、初診の男がスーツを着てそのズボンは膝ぐらいのところまで下ろされており、彼女の手が伸びていて、触れていた。バカ鴉の手は彼女の下半身にもうすでに入り込んでおり、指を動かしているらしく、ここからでは見えないが、白衣が揺れていた。

俺は意気消沈した。今、着ている奇妙な格好からすると、初診の男ははるかに洗練された格好であり、彼女のほうといえばこれまた白衣にスーツというおれを同等の扱いを許さないような格好だ。二人が二人とも垢抜けていたため、余計惨めに見えた。それに追い討ちをかけるかのごとく、この光景を見ているのであるから、惨めさはよりいっそう男を萎びた、半ば腐りかかった青菜のように情けない心情にした。男は耐えられずに診察室に入り込んだ。そして、こぶしで初診の男の陰のうをつぶすかのように殴った。

「出て行け、この鴉、バカ鴉め！」と大声で叫ぶと、彼女は急いで飛びのいて、下着とスカートを同時にもぞもぞしてあげたのだが、それはとても速い動きであり、彼女は格好を整え、俺は奇妙でもきちんと服を着ているために、下半身を露出して、悶えている、苦しんでいる初診の男を見下すにはちょうどいい状況となったのだ。

「二度と来るな！」とあって、股間に踵を思いっきり振り落とした。こんなときはよく酔っ払ってテレビで格闘技を見ていた、アンディー・フグの踵落しの真似をしていたことが役に立つのである。

「こんなのが目当てなのは、お見通しだ！このバカ鴉め！もう一度言う、二度と顔を見せるな！この家にも二度と近づくな！」と、怒鳴ると、初診の飄々とした男は、気まずそうにしてズボンを上げるのだが、股間の痛みはそうおいそれとはひかないらしく、ズボンを上げる手がわなわなと震えていた。

「女に手を二度と出してみろ、股間を砕いてやる！」と紐を固結びにした上にもう一度固結びをするかのように大声で言った。そうすると、初診の男は、「同意だったんだ」といったので、彼女への説教はあとにするとして、この男に口を利けないようにドリルをもって目玉に付き立てようとしたところ、初診の男は痛みには堪えかねて、まさに鴉がゴミ箱に捨てた食べ残しのハンバーガーを突つくかのように跳ね、逃げていった。

それから、彼女に問い詰めると、案の定、昨日の電話で意気投合したのだ、そして、俺を騙したのか、との問いに彼女は、そんなことはないけれども、…とあって語尾を濁し、ごめんなさい、とあって涙を流した。そこで性的興奮の後に泣き出す心境は理解できない。あの男は悪いが、きみも悪い、きみと俺はまだ付き合っている最中だ、失礼だと言った。

「ね、もうそんなに責めないで、抱いて…」と、白衣を脱ぎ捨てた。

「今そんな気持ちにはなれない、それにこんな格好で、そのうえ説教をたれたんだ、きみを責めたんだ、それで反省してくれるのかと思ったら、そんなことを平気で言う、きみは変だ」と言った。そうすると、彼女は白衣を診察椅子にたれかけ、ちょっとした遊びのつもりだったの、でもあの男はだめね、不能よ、といい始めた。不能ではなかった、いきり立っていた。嘘つきめ、だんだん彼女が嫌いになってきた。

二十坪ほどの土地に祖父の代に家を建て、祖父が動けなくなったころ、両親と俺は住み始めた。家の風呂場からは、隣の敷地になっており、その広い庭を眺めることができる。そこには、昭和か、大正時代に建てられたと思われる蔦の絡むぼろ屋があった。その家には老夫婦が住んでいて、夫は引退した大学教授であった。庭は手入れが行き届いておらず、森か雑木林のようだった。家の風呂場には木苺の枝が伸びて窓にかからんとしていた。子供のころはその木苺の実が熟したころ、父と一緒に入浴をし、父が、「これは食えるんだ。ほら、食べてごらん」といって、実を取り、食べた。父ももいで食べた。甘酸っぱい野生の味がした。それを祖母が何かの弾みに外に漏らし、大学教授が父に語ったそうだ。筍などはいいが、枝が伸びそこに実った果実はいけない。父はそれを怒って、家で祖母に八つ当たりした。祖母は、わたしはもう何も話さない！と叫んで、父としばらく口を利かなかった。父にとっては、その実を悪意もなくもいで、それもその家が手入れがいたらなく、伸び放題伸び、それを放っておいて、食べたからといって、説教をするとは何様だ、あいつは何様のつもりだ、といたかったのだろう。それとも、まだ幼い子供が嬉しそうに食べた顔を思い起こしたか、親である自分の一時の幸福な光景を爪を立てて破り、裂かれたからかもしれない。父は、その裏に住む、大学教授に冷たくなった。

嫉妬は彼女をみすぼらしくしてしまうのかも知れない。今、食堂で女と食事、粗末であるが、それをとって化粧をしておらず、眉毛も描いていないで、今気付いたことなのだが、顔にそばかすがあること、目やにがついていること、髪が整っていないで寝癖がついていて、雨雲が立ち込めて蛍光灯のもとで色がはっきりしないために浅黒く見える、そんな女を半ば蔑んだように見た。その蔑んだ見方というのも、初診の男と接触があった、生々しい接触があったからなのかもしれない。嫉妬なのだろうか。男は回想してみた。男に遊び心を抱く彼女を嫉妬したのではなく、嫌悪感を抱いたのだろうか。だとするなら、なぜ男が付き合っている女以外のものと遊んだからといってそれを認め、女が認められないという伝統——それは恐ろしく古い考え方である、ということ男は知らなかったのだが——をこの女が拒むことを男が寛容になれないのはどうやら離れの老婆から断片的に聞いてきたこの女への偏見なのかもしれない、と思った。この偏見というものは、付き合っているうちに——それがたとえ何年でなくとも——自分自身が主導権を握ることが少なかったからではないだろうか、それとも一人前の、普通の男性として付き合ってもらえなかったからではないだろうか——、そこに原因があると男は分析した。

「ねえ、まだ怒っているの？」と、彼女が見つめてきた。その視線をさえぎるように新聞紙で顔を覆った。それでは、怒っていることになる、そう思い直し、新聞紙を畳んだ。

「ちょっとした考え事さ、きみはまだ初診の男に、これは正直に言ってもらいたいのだが、なんと言ったらいいのかわからないが、これは恋愛感情ではないと思うのだが、関係をもちたいなんて感情は抱いているのか？」と、男はぎこちなく言った。

「もっと言い方があると思うのだが、今のところ、すごく不安定な立場に置かれているんだ。それに、二階のMさんのように、きみにちょうどケージの中のペットのように扱われるのではないだろうか、そんな不安も抱いている」

「そんなことはないわよ、心配しないで、あの人はわたしにとってちょっとした火遊び…それ、認めてくれない？…それから、Mのようにあなたを扱ったりはしないわ。それだけは信じて」

「火遊びか…」と、男は項垂れた。

「火遊び、っていうのは浮気とは違うわ、あの男をここにおいて、あなたを放り投げるということはしないっていうことよ、あなたはわたしとつながりがあるし、それにタイプだわ…」

彼女は、おそらく俺を見ているのだろうが、おれは新聞紙の一面のコラムを見てその中の文字、目に飛び込んでくる活字を追いかけていた。生物、学会、理科系、繁殖、猿、女性。

「いや、あれは浮気だ」

「違うわよ」女はむきになって続けたが、男にとってそれらの言葉は全て言い訳でしかなかった。「あなたはわたしの前にも付き合っていた人がいるはずよ、それに関係だって結んだと思うわ、それを認めないで、わたしがつい、うっかり、ちょっとした弾みで、遊んだからって、そんなに言われたくないわ、それに、私はあなたのことを忘れてもしなかった、だから、完全に体を許したわけではないのよ、…」

「いいや、きみはそう言うが、俺がもし、きみとこうした生活を営んでいて、その一方で他の女に体を使ったともなれば、やはりいい気分じゃないと思うがね、そうは思わないのだろうか」

「それはいい気分じゃないわよ、正直に言って、ただ…」

「ただ、わたしの場合は特別で“下の口が疼くと”でもいいたいのか！」と怒鳴ると、女は、

「もうやめて、そんな言い方よしてよ、あなたってなんだか酷い人に見えてきたわ、どこでそんな言葉を使っていたのか知らないけれども、酷いわ。なんていう言い方をするの！」女は泣き出してしまったが、男は相当怒っていたため、

「きみは今おれが言ったこと以上のことをおれにしたんだ、その辺を弁えてくれ」と言い残して、自分の部屋に向かった。女は後かたづけを済ませると、同じく自分の部屋に足を引きずるかのように向かった。二人とも言い争ったためか、食堂には取り残された、冷め切ったフライド・チキンのような雰囲気はぼつんと、ぼんやり立ち込めた。

男は自室――この部屋は自分の稼いだ金で買った家の部屋でもないのだが――そこで怒りを静めようと躍起になっていた。言い方がまずかったことは自分でも認める。だが、どうしても彼女を許せなかった。それは、彼女と同棲をしていたからだろうともいえるし、その同棲をしていたことを彼女は初診の男と関係をもたないまでも、性的遊戯に酔いしれていたことで足蹴にされたためであろう。その足蹴にしたことが仮に自分がそうであったならばどうだろうか、彼女は許してくれるだろうか？これはおそらく主導権を彼女が完全に握っていることを露呈していたから、というのが真相だ。そこで自分が惨めであった、情けなくなったことの反動で怒ったのであろう。この怒りは当然である、と男は怒ることによって彼女がどういうわけか悲しむ――これは男にとっては謎であったのであるが、というのも浮気をしていたことを罪深いこととして認めないからであるが、――それがわからなかった。ただ、彼女のほうから譲歩してこないかぎりは…と考えを進めると、ここ、つまりこの家に自分がいることは彼女の許可をもらっているからなのだ、ということに突き当たり、やはり自分が折れるしかないのだろうと、半身を食堂に持っていき、彼女を手招きしている姿が目につく。浮気などというのは関係の底の底に繋がりがあ限りは許されるのかもしれない。それを自分は情け容赦なく怒り、彼女に当たった。そのために彼女は悲しんだ。



だが、どうしても怒りは収まらなかった。ただ、言えることはこうした冷めた関係はいずれは溶解し、和解し、元の鞘に収まるのだろう、という希望が僅かではあるが、男に生じていた。それにはきっかけが必要だ。そのきっかけというのは笑いだろうか。そんな考えを男は持ち静かにふとんを敷き、横になった。

彼女の場合であれ、付き合っている異性に対して過去の異性との付き合いを喋りだしたとしたら、途端に関係などといったものは破綻する。ましてや、今現在そんなことをしたとしたなら、関係などというものはぎくしゃくしだし、喧嘩になり、冬にアイスクリームを震えながら食べるようなものに成り果てることだろう。男はもう忘れようとした。それが男がとれる技量であり、寛容さだろうと思ったからである。しかし、彼女の悲しみは波がひくようになるのだろうか。それはわからなかった。そして、彼女の悪癖である。それは染み渡り、そうおいそれとは治らないだろう。拾われたものの不自由さ、それに男は気付きだした。

昼になり、食事の時間となった。男は空腹を感じ、食堂に向かった。そこに彼女がいた。まるでこれから責めを受けてもかまわない、ともとれるし、反撃をしよう、ともとれた。化粧をし、きれいになっていた。男は別に化粧などしなくとも一向にかまわなかった。ただ、これから彼女が出かけるのではあるまいか、と思った。

「どこかに出かけるのかい？」と、男はもうすでに怒りは乾きもののように鎮まっていたのであり、彼女の返事を待った。彼女は別に…といった。これは出かけるのは気まぐれであり、その決定は俺にあるといった返事だ。

「もう怒っていない。きみを悲しませたことは詫びるよ。ただ、きみが、これはおそらく老婆が言ったことなんだが、それが心の中であって…」

「もういいの。私が悪かったんだから」と言いつつも、男を見なかった。

「こういっちゃ何だが、一緒に食事に行かないかい？」

「今買い物に行って来る、料理の本を見ていたの…」

「食事を作ってくれるんだ…」

返事はなかった。

子供のころ、小学生のころだろう、女の子のクラスメートを家に遊びに来させた。ゲームをしたり、もう忘れた。ただ、こんなことがあった。彼女は空腹のために、パンを無断で食べたのであった。それを許せなかった。これから、パンを食べ、出かけなくてはならなかったからだ。そのときの彼女は悲しそうで、おびえるような表情をしていた。

彼女は出掛け、なかなか帰ってこなかった。そこで水で空っぽの胃から分泌してくる胃酸を薄めた。二階で音がしたので、俺は二階に行った。あの老婆の言っていた、部屋のドアが少し開いていた。中からはくうくうといった人間の口から発生する音が聞こえた。思い切ってドアを開けた。すると、奴隷Mがケージの中において猿轡をしていた。彼がいる中には黄色い小便が池を作っていた。男はケージを開けるにはどうしたらいいのか、Mに訊こうとするのだが、猿轡をしており、訊きだすことができなかった。そして、彼に手招きをして、ケージから猿轡を取るから、といい近付くようにいった。すると彼は傍によってきたため猿轡をはずすことができた。彼には独特の臭いがつき、鼻が曲がりそうだった。おそらく、風呂にも入れてもらえないのかもしれない。仮面を取ろうと同意を求めたが、彼は拒否した。そこで、男は、「またなんだってこんなところに閉じ込められているんですか、この前は食事できたのでしょうか？」と言い、部屋を見回すと、鞭と浣腸器、それから張り方があった。

床は水色のタイル張りで、汚水を流せるようか、責めに使うのか水道が備えられており、汚水口の周りには黴が生えていた。壁には皮の相当分厚い音漏れを防ぐ設備が施されており、映画館でもこうまでしないが、劇場入口のドアのようになっていて、

「この部屋にどのくらい閉じ込められているんですか？」と、返答を待った。しかし、彼はなかなか話そうとせず、始終鼻詰まりのような奇妙な音を口からか、鼻からか分からないが発していた。そして、こっちが何か話題になりそうなことを探そうが、そのようなことはお構いなしであり、じっと男の自由な体を、特に目を見ていた。そして、他に誰も来ないことが分かったのだろうか、自己紹介をし始めた。

「わたくしは、このお嬢様と出会いましたのは、もうかれこれ三年前になります。わたくしは当時患者として、う歯がございまして、治療を受けに、このオキアミ歯科医院様を受診したのでございます。まず初めにお嬢様が先生でございまして、わたくしが患者であった頃のことから話をさせていただきます。先生は親切でありました。わたくしが痛がってもなお歯科を受診しなかった恐怖感をお嬢様は、いや先生は、全てお見通しのようにありまして、まるでわたくし、このようなわたくしの下種な心をお読みになられますことを非常にわたくしは、不思議に思いました。そこで、お嬢様は診察をすばやくして、わたくしにこれからゆっくり時間をかけて治しましょうと言いました。金銭的に問題はなかったのですが、わたくしはお嬢様のあどけない顔を拝見してからというもの、このオキアミ歯科医院を受診するのが、う歯の治療でなのか、それともお嬢様目当てなのか、分からなくなっておりました。家庭内にも、職場にも問題を抱えておりました、いっそのことお嬢様と生活をはじめたく心のそこで考えておりました。その点をお嬢様がはじめに感じたときは、わたくしが麻酔をかけられる時に白衣の裾をぐっと握り締めたときにお嬢様が白衣の下に何も身に纏っていなかったときでありまして、そのことをなんとなしに訊いたところ、私露出狂に興味があるの、というのであります。わたくしはそんなことは考えずにお嬢様を、今から考えるとそれが引き金になったのでしょうが、押し倒し、抱いてしまったのでした。そうすると、お嬢様はえんえん泣き出したので、わたくしがどうして泣くのです、と問いましたところ、私今、一人で生活しているの誰も私のことを思ってくれていないと思ったの、で、つい、などと言われました。しかし、それは真っ赤な嘘でありまして、わたくしはお嬢様とだんだん妙な関係になっていきました。それからというもの治療していくうちに、お嬢様はあちらも、ここも、と、いたずらをする少女のような顔をしてう歯を探り出してわたくしは歯の半分を削られてしまいました。」

「それ」といってMは口を開くと、確かに言うとおりに、歯は、普通の半分だということが前歯から分かり、そして奥歯にいたっては、十文字に削られて、それを見るために男はMの口の中に顔を突っ込むようにしなくてはならなかった。

「神経が出て痛くないのですか？」

「それが不思議と痛くないのです。わたくしは、多量の麻酔――多量といっても通常の量よりも少し強めたもので、致死量には達しないわけでありまして、――それを打たれ、口の中は痺れてしまい、感覚がなくなっていました。麻酔の中を泳ぐおたまじゃくしのような私の舌は、あさっての方向を向いてだらりと、垂れ下がって、涎をたらしつづけたのでありました。そのときの麻酔が覚めていないのでしょうか」

「いや、違う、全ての歯の神経を取られたんだ！」

「そういえば、お嬢様はピンセットを使って糸くずのようなものを捨てておりました…」

Mは、横目で首の座らない赤ん坊のように震えていた。

それが、真相を知ったためか、それとも永い監禁生活の障害なのか、判断できなかった。しかし、彼は彼女以外の人間にまるで生まれて初めて会うかのようにして、喜んでいただろうが、それは男にとって不愉快なことであった。それは、Mが手淫をしだしたからであった。彼は、男に注意を受けてもやめず、喋りだした。

「齒のことはもう申し上げることはございませんが、わたくしには教育哲学のようなものがありまして、それから分析させていただきますと、お嬢様は少女時代はかなり、衝撃的な暴行を受けたのであるまいか、と思われる節がございます、わたくしとプレーをしていただきましている間に、心の中でお嬢様にこう問い掛けるのであります。『なぜそのように異性であるわたくしを責めるのでしょうか?』と。そうしますと、それに呼応するかのように鞭やらエネマを多めに与えられるのであります。学校にいたときに、この子はおそらくサディストになるだろう、という子…」と言う、Mの言葉を遮って、男は尋ねるのであった。

「じゃあ、もとは学校の先生だったんだね」

「そうであります。教師をしておりました。当時はまるで時代錯誤のような管理教育がなされておりました、学校長は入学式、ことある毎に教育勅語をお読みになるなど管理教育というよりも、その仮面を被った軍国主義色の強い教育を施しておりました。わたくしは国語の教師をしており、大学時代には空手をしていました。そこで、体罰を容認するべく、その方針を現場で施行いたしましたわけであります。学生に対しては痛みを持って物事を知るべし、とした考えでございます。手で鼻血が垂れるくらいに叩くことはそれは！、それは！――と言って、かなりの興奮をしたのだろうか、精液の代りに小便を垂らして――け、け、……その頃に育った子供たちはやがて親となり、現在のすさまじい世の中が到来する訳であります。これは目にも鮮やかかなりとも言えましょう。完全な帰結であったのであります。わたくしもその責を負うべきなのでしょう。」

「しかし、なぜだろうか？あなたはマゾヒストのように思えたりしている一方で、サディストのようでもあるようだが…」

「それが真正マゾヒストの性とも言えるのです。よくサディストはマゾあがりがいい、とおっしゃいます。それと同じく、マゾヒストにもサディストの要素がなくてはこうしたことはできないのでしょうか…。これからはわたくしなどのことはどうかお構いなしにしてくださいませ。わたくしなどといったものは本当に、鯖の生腐れと申しますように、精神が腐りきっております、その臭気が、汚臭がお嬢様の気に障りなどいたしましたら快樂の鞭が飛び交うのでありまして、わたくしはその鞭に打たれながらも、勃起をしてしまうのです。それから、エネマであります。これは妻にも要求していたのでありましたが、なかなか同意を得られずにいた、わたくしの快樂の極値でありました。これらが、マゾヒストの一種の傾向なのだと、お嬢様は分析なされました。」

「俺にはちんぷんかんぷんだ、逃げ出したらいいいじゃないか！」

「いいえ、わたくしは忠誠を誓うことをいたしました。一種の儀礼、儀式でございます。そのために、それに背くことは微塵も考えたことなどございません」

「だけど、食べ物も与えられないで…すごく痩せているじゃないですか」

「しかし、これから栄養分をしばし与えられ、肥えさせるのでございます。そうしてまた痩せての繰り返しであります。これもひとえにお嬢様のお考えでありまして、わたくしはお嬢様に足蹴にされてもなお、ついていく所存でございます。」

「どうかしているとも、あなたは人間だ、それに元教師だ、なんでこんな真似をしているんですか、やめにしたらいい！」

しかし、Mは倒錯した性関係を否定する言葉には一切耳をかさなかった。男はこのことを理解できず、どうかこの駄目になってしまった人間が、少しでも立ち直れるようになれないものかと、もどかしい思いで話をするのであった。

「わたくしの役目ももう終わりのようであります。これはお嬢様が奴隷二頭を飼うか、ということです。もちろんあなた様を奴隷にするにはわたくしのように一年も必要がないでしょう。既に、あなた様は虜になっていらっしゃるようなので。」いつの間にやら、手淫を止めていた。

「その辺のことを少し詳しく話してくれないか？」と言って、「このケージはどうやって開けるんだね？」男はケージをこじ開けようと手を動かした。

「その、壁に、赤い壁にかかっています鍵がそうであります。」

男は奴隷Mを解放してあげたのであるが、階下の廊下で話をするしかなかった。というのも、あまりにも汚れていたため、他の部屋を汚すおそれがあったからである。

「お嬢様ははじめわたくしを普通の男性として扱ってくれたのですが、教師という職柄どうしても、性癖が変わっているものがままございまして、わたくしの同僚などは覗きで興奮するものでありました。いつだったか、養護の先生がトイレに入っていったのを追いかけて行って女便所に入り、その養護の先生のちろちろというお小水の音を聴いてマス…そんなことよりもわたくしの場合ですが、わたくしはどうも奴隷として扱われ、散々責め苦をあげたところにどうやら性的な絶頂感があるようであり、それを妻は気付いてくれなかったんですが、お嬢様はそれはもの見事に見抜いて、とうとう今年で二年になりますが、ずっとあの部屋に監禁されております。なぜ、あなたを奴隷にできるのかは分かりませんが、わたくし、極限的に言うのであるならば、わたくしの心の底には、そうしたものが微かにあったということでありました。だから、あなたにある要素があるとすれば、その要素をお嬢様は見事に見抜いて、あなたを奴隷にすることができるということであります。集合の問題とおんなしです。で、銀行員の話はいたしましたでしょうか？」と、Mがそろそろ調子付いてきたときに、

「二リットルだよ！」と、背後から、彼女は凄んで言った。

「ああ、お嬢様！」と、Mは恍惚とした表情を仮面の下に浮かべて、拝むようにして、女の前にひれ伏した。

俺は、トイレ、と言って向かった。すると、不鮮明な二人の声やり取りされていた。二階へ向かう階段で、二人の声がいつそう狂ったようにこだまして、重い猿を麻袋に入れて階段をずると引き上げていくような音が耳に届いた。

何の事はない。ちょっとした行き違いだ。彼女が男を連れてきたのであった。それが、あのバカ鴉でなかったことが唯一男にとって救いであった。奴隷Mは彼女の話では処分するらしく、そのために、部屋を改造すると言う。その大工かと俺は思ったのであるが、どうも様子が可笑しい。

「紹介するわ、Kさん。大学時代のクラスメートなの。なんだっけ？何のクラスだったけ？」

Kは照れ隠しをするようにして、俺の前に出てきて、彼女とまるでこれからベッドに向かうかのような仕草をして、低い声で、不鮮明でこう言った。

「確か、フランス語、第二外国語は苦手だったんで、忘れちゃいました。フランス語でいいんだよね？」と、今度は彼女にふった。そこで、俺は少し頭にきて、

「もっと口の回りを良くすることだね。歯医者なんだろ。不鮮明な発音なら、フランスもドイツも日本もかわりゃしまい。このどもりめ！」

これには、さすがのKも怒りを覚えたらしく、自慢話をしだした。

「ぼくは、きみの言うとおりに、うまく発音できないけれども、ぼくはいま美容歯科をやっていて、これは景気に左右されないんだ。結局金を使ってもきれいな歯並びにしたいし、きれいなきみのようなヤニで汚れた歯になりたくない願望があるからね。」

「どのくらい稼ぐんだい？」

「四千万。」

「すごいね」と言いつつ、俺はフックをこいつに決めた。「これで、自分の仲間に歯並びを治してもらいな、」と言い捨てた。彼女も彼女で、こんな奴を介抱している。

大体こんな奴をなぜ彼女は連れ込んだりしたんだろうか、という疑問が俺には浮かんた。そこで、彼女に訊いてみるが、いっこうに返事をしない。俺の待遇はどうなるのか、そして、この美容歯科の男を彼女にとって恋人として扱うのか、だとするならば、俺はどんな立場、彼女にとって、俺はどんな立場になるというのか、さっぱり見当がつかなかった。

「露出狂の枠として、二階にいるMのように逸脱した人間として俺をこれから扱う算段なのか？」

「違うってば！そんなことよりも、Kさんにひどいことするわね、これじゃ顔が腫れるわよ」

「腫れるように殴ったんだ。わざとだ。」

「何が不満だって言うのよ」

「別に…ただ、こいつをきみが連れ込んだからさ、こいつ高慢ちきだよ」

Kは頬を擦りながら、苦笑いをしたが、その笑いが、男にとっては理解できないものであった。

「あーイタタ・・・こりゃ参ったよ。ちゃんと紹介してくれなくちゃ、ひどいよ、まったく、ぼくのことちゃんと説明しないから、こんな乱暴を働くんだと思うよ、そんなにひどいこと言ったかな。そりゃ、少し頭にきたことを認めはするさ、でも、パンチを食らうなんて真似、よくするさ、大学でもこんな奴には出会ったことはない」

「大学にいなかったって、世間じゃいるっていうことだよ、ぼく。」と、言って手入れの行き届いた刀を武士が磨くように、男はこぶしを作り、今度は腹に食らわせた。うっ、と唸り、美容歯科は倒れた。喧嘩になっちゃた！と、彼女は叫んで、止めようとするが、男は馬乗りになって、顔をこぶしでがんがん殴りつけた。何をそんなに憎んでいるのよ！と彼女は再び叫んだが、その辺はどうも男も理解していないらしくただ、なんとなく体が反応するのであった。

「おそらく、拒絶反応でも起こしたんじゃないかな、俺はこの家の一部のようになってしまったようだから、この家の敷居を俺以外のものが跨ぐとこうなっちまうんだろうな」と、冷静に彼女に男は話した。

「もう、止めて！お願いだから、これ以上Kさんを殴らないで、もうKさんを連れてこないから！誓うわ！」と、彼女が大声で男に言うと、男は殴るのをやめた。

「結局のところ、きみ次第ってことだよ、きみが変な奴を俺の目の前に突き出したら、きみを殴らない代りにそいつをきみの分まで殴ってやる、そういうことらしい」と、男は血だらけのこぶしをウールのズボンで拭いた。Kは既に意識を失っており、顔はおそらくこれから紫色に変色すると思われるくらいに赤くなっていた。

「まるでオテモヤンだ」と、男はKを見ていった。

不愉快なのは、Kをよりにもよって俺の部屋にふとんを新たに敷いて、介抱する彼女の考えだ。

もう一部屋あるのだから、そこに連れて行けばいいものを、どのような理由があるのか分からないが、これでは火に油を注ぐようなものだ。

「なんだって、この部屋にこいつを入れるんだよ」

「部屋がないじゃない？」

「きみの部屋の隣がいいと俺は思ったんだが、使えないのか？」

「あ、トイレの前の部屋は嫌な親戚が来たときだけよ」

「なんで、こんな奴に肩入れをしたりするんだ」と男が言うが、彼女は氷嚢で、Kの顔を、首筋を冷やして、何も答えなかった。

「おい、聞いているのかよ！」

「そんなに怒鳴らないでちょうだい」彼女は大切な人を扱うようにKに接した。これはただの親切心や、友情などと言ったものではない。また、Kを連れて来ない、というのは喧嘩を止める——もちろんこちらが優位でつまらぬ揉め事ではあったもので、勝負というのには少しもふさわしくないものであったのだが——そのための口実でしかない。だから、このままだったらと、彼女はKとやらをこの家に、いや俺がいる部屋にまるで仲のよい恋人のように寄り添って眠るようにしておくのだろう。しかし、この二人の男で誰がこの家から追い出されるのか、との考えには、俺は先ほどのアジを売っていた魚屋を想像し、新鮮なものを置いておく、と結論が出てしまうのであった。Mは放り出され、戸口ですすり泣いても、俺はそのまま路頭を彷徨い、そして、盛り場にくりだし、暴力バーで被害に遭って、誰か親切な人がいればどうにかなるだろう、少なくとも家には返してくれるだろう、ということまでも想像した。

「そんなにKに尽くすんだったら、その愛情の一部を俺に分けても罰は当たらないよね」

「なに言ってるのよ、この人妻子もちなのよ、それをあなたったら、もうしょうがないわね、奥さんに事情を説明しなくてはならなくなっちゃったわ、あなたからも詫びてちょうだい、なにを勘違いして、こうなったのかを！」

「そう言って、俺をごまかすつもりだね、そうはいかないさ。こいつのこときみは好きなんだろう、そして俺を…」と言った瞬間、彼女は俺を平手で叩いた、そして、悪いことをしたように反省したようにして、

「被害妄想よ、そう、あなたをじっとこの家から出さなかったからなのかもしれないけれども、ひどくなってしまうわ」

「なに、俺が被害妄想をもっているって言うのか？」

彼女が頷いた。そして、またKの氷嚢を取替えに冷蔵庫に向かった。そして、時計を目にして、もう四時過ぎたわ、どうしよう、もう夜になってしまうわ、とそわそわと落ち着きがなくなってしまった。

「そんなに慌てることないさ、簡単だよ、救急車を呼べばいいことなんだ」

「なにバカ言っているのよ、警察が絡んだりしたら、あなたどうなっちゃうのか分からないの？まさか、俺は魚から変身して人間になって、そして、八百屋が一枚絡んでいて、そして、歯科医院で世話になって、とでも言うつもりなの。誰も信じちゃくれないし、それにあなた病院に強制入院されちゃうのよ！少しは考えてよ」

凶星だ。俺の体験したことなど誰も信じちゃくれない。彼女でさえ、魚をかりうじて信じだしたのは俺と、関係を持ち、新しいパーツ、アルジネイト、といったところからだろう。そうだ、金冠はどうなったのだろう。

「こういうときに言うのもなんだけれども、俺の金冠は技巧師さんから届いたのか？」

彼女はきょろきょろして、頭を搔きだした。

「もういいかげんにしてちょうだい。と・ど・い・たわよ！こんな時に。もう少し頭がいいと思ったのに…」

しばらく様子を見たのだが、歯ぎしりをしだしたため、脳にダメージがあるのでは、と女は考え、救急車をやむなく呼ぶこととなった。そこには、混乱と男の刑罰を軽くする計算が混ざった判断だった。

サイレンを鳴らさないようにしてください、と俺は言ったが、向こうで協力してください、近所まできたら消しますので、親切に言ってくれて、これは行き届いた気配りだと、感謝した。

救急車が、オキアミ歯科医院の前で止まった。赤いランプで集まった、バカな野次馬どもがそれ相応の好奇心丸出しの顔をして、互いに親しく語りだした。それでなくとも、彼女のことだ、いい噂などなかったのだろう。それでも、俺は酸素ボンベを持って救急車に乗り込もうとした。かなり重いもので、こんなところで肉体労働か、とあきれた。そうしたら、彼女が、一人で行くから留守番していて、と言い残して、付き添いで彼女一人だけが救急車に乗り込んだ。病院との電話連絡で救急車は一向に動こうとしないため、野次馬が俺の周りに集まってきた。たいていは、担ぎこまれたのは患者さんかな、それとも男の人かな、というたぐいのものであったが、俺の奇妙な格好を指をさして若い女の子が笑っていた。そして、俺が歯科医院の中に入ったときに、サイレンを鳴らして出て行った。

それから、俺は彼女からの連絡を待った。昼ご飯もろくに食えなかったため、夕飯のときなどは非常に悲しいくらいにKが憎たらしかった。そして、連絡を八時まで待つと、彼女の財布をビニール袋から出そうとしたときに、ビニール袋の中にスパゲティーと、ミートソースの缶があるのを見つけ、小躍りした。これくらいの調理なら、俺でもできると思い、作って食べた。一袋のスパゲティーが空になり、もうすこし食べられそうだが、彼女の分もとおかなくてはならない、と考えて、もう一袋は開封しなかった。彼女が夜中に帰ってくることがあったならば、今度は恩返しと愛情を込めてスパゲティーをこしらえよう、それがたとえ明け方であろうとも。そうして、満腹で連絡を待っていると、二階でごとに音が出たので、Mの食事は、犬はどうなのか、心配になった。ただ、Mに関しては人間であるから、そこらに放してやったら、買いにいけるだろう、そんな時に限って自由のありがたさを身に沁みてもう帰ってこないかもしれない、それならそれで俺は構わない。ただ、犬は自分では買に行けないので、俺が用意しなくてはならない。こんなときこそ、あの離れの老婆が役に立つというものだ。そこで、中庭に出て、離れを見るが、電気はついておらず、いつの間にか彼女がひまでも出したのか、それとも施設に入れたのか、まだいるのだろうか、厚いカーテンが引かれていて、真っ暗だった。老婆の力は借りられず、食堂に戻り、犬のために缶詰を探すが無いので、仕方なくMの食事と、犬の分を、金を持ってコンビニにでも行けば手に入るだろうという安易な考えで、家を後にした。

外は静まり返り、しばらく家から出なかったために新鮮に感じ、それと足が感覚を取り戻すような妙に高ぶる気分がした。長い散歩をしたものだ。すっかり迷子になってしまったのに気づいたのは、町の交番の前だ。そこで、交番に入り、酔っていないことを告げて、地図を見せてもらった。それは奇妙な地図で、アフリカの地図であった。

「オキアミ歯科医院、というところへんでしょうかね」と、尋ねる。すると、そんなことは安易に教えられない――それもそうだ、夜に救急外来でもない町の歯科医院を案内することは、犯罪に繋がる可能性もあるわけである――そう言おうとする表情をして、

「何しに行くんだ、こんなに遅くに」

「友達の家なんですよ」俺にしてはいい言い訳だ。

「教えられないね」

「彼女知っていますよ、俺のこと」

「じゃ、あなたが電話して、案内してもらいなさい、そんなことより、早く家に帰りなさい」



「その家が、オキアミ歯科医院なんですよ」

「あなたの家なのか」

「ええ」まずいと思った。

「名前は？」

適当にごまかして逃げた。追ってはこなかったものの、警戒網の一つや二つ敷くことは可能であろう。だとするなら、今医者に行っている彼女は、Kに関しての事件性を帯びた事態に巻き込まれ、俺は俺で僅かな警戒網であったものが、次第に大きな事件の中、真っ只中に放り込まれることになってしまうのだ。本能で逃げ出し、本能でオキアミ歯科医院を探すことだ。

先ほど、救急車を呼んだときには、住所を教えてもらったのだが、また目印となるレストラン——住宅街でやっているドイツ料理のレストランである——その名も教えてもらったのだが、そのレストランもドイツ語でカタカナであったために、思い出せないのであった。

夜の銀行というのは本当に日中活動しているのか、というくらいの静けさであり、その銀行の横に坂があった。オキアミ歯科医院から、坂を下りた記憶があった。ただ、この坂を上ったときに、おそらくは高級住宅街が開けているのだろうとは思っているのだが、それよりも、コンビニに行って、教えてもらったほうがいい。しかし、この大通りだということに、人影も無く、コンビニも無かった。勘を頼りに歩きつづける。昭和初期に建てられたと思われる商店の二階が明るいかと思うが、どの商店もシャッターを下ろし、暴走族の落書きがスプレーで描かれ、それは暗闇で、薄ら明るい街灯で、暴力と、ナイフと、性と、バイクと、タバコと、酒と、リンチを連想させた。

なぜだか、心の中では、歯科医院からどんどん遠のいているように感じた。考えてみれば、俺と彼女が一緒にいる間に、彼女が全部処理していたのだ、Mに対しても、離れの老婆にしても、犬にしても、それが、ちょっとしたことで、彼女が居なくなった途端に、俺はパニックになってしまう。そのパニックもこうして、疲れ、彼女の買ってくれたとても派手な服を着て、襲われても仕方ない格好でうろついている夜になって初めて生じたのであるが、決して難しいものではないのだ。買えばいいのだ。金もあるわけだ。その店がここには見当たらないのが、不安になった理由だ。今ごろ彼女は病院で何をしているのだろうか。警察が絡んでくることは間違いが無いであろう。そうすると、俺は捕まり、彼女の言うように、措置入院という運びになる。

その辺は彼女の頭の良さでどうにか切り抜けることはできるだろう。それに彼女なら、有能な弁護士を雇うことも可能だろう。そうじくじく考えないことだ。それにしても俺はずいぶん歩いたのだが、一向に町並みが変わらないので、仕方なくタクシーでオキアミ歯科医院を目指すことにした。空車と言う赤い文字が飛び込んできて、俺の前で止まった。そして、運転手に行き先を告げるが、運転手は分からない、という、そこで俺が、近くにドイツ料理のレストランがある、住宅街だ、という、あそこかな、という返事がきた。そこで、俺はたぶんそうだと思う、といった。

まったく人を馬鹿にした話だ。オキアミ歯科医院はすぐそこだったのだ。ワンメーターでお釣りが来るくらいに近かった。運転手が、歩いたほうが良かったんじゃないですか、といったので、いいや、俺はずいぶんと歩いて、大変疲れたし、それにこの町はまったく知らないから、授業料だと思って受け取ってくれ、と言い、運転手に代金を払った。

こうめっちゃくちゃな町づくりでは、この町にはじめて来たものなど、蟻地獄に嵌まる蟻のようなものだ。これはおそらく、継ぎ足し、継ぎ足しして作った結果こうなったのだろう。町長とやらに会ってみたくなかった。なぜ、交番に関係の無いアフリカの地図なんか置いてあるのだろう。変な町だ。

やっと落ち着いたころ、電話がなった。彼女からだった。

—何度も電話したのに、出ないのはなんでなの？

—いや、二階の人の食料と、犬の缶詰を買いに出かけたら、迷子になったんだ

—で、どうやって帰ってきたの？

—タクシーで帰ってきた。運転手が良かったのと、それと、俺がレストランを覚えていたことが役に立ったようだ、無事だよ。それにしても、変な町だね、交番にアフリカの地図があってさ、おまわりさんがオキアミ歯科医院を教えてくれないんだよ

—そうよ、この町少し変なの、交番は実際警察が運営というか、設けているか、それとも、民間の警備会社が設けているかそのあたりも良く分からないのよ、でもアフリカの地図だなんて奇妙ね、それより、あなたご飯はどうしたの

—きみが買ってきてくれたスパゲティを自分で調理して食べた。

—そう、じゃ、すぐ帰るから、帰ったら話をするわ

—ご飯は？

—いらないわ

女というものは平気で食事を抜いてしまう。彼女がいらないわ、と言ったときそう思った。ところで、Kの奴どうなったのだろう。死んだのだろうか。それなら、彼女のいまの電話で死んだことを報告することだろう。どっちにしろ、彼女は俺の尻拭いをしたわけだ。気の毒なことをしたものだ。おそらく、病院には親族が集まりだし、彼女を散々叩きのめしたことだろう。それに彼女は耐えて、俺とKがもめたことを少しも喋らず、持ち前の気転の良さで切り抜けたのだろう、その光景が浮かぶようだ。なんてことを俺はしてしまったんだ。彼女を傷つけたから後悔するので、Kが負け犬のようになったことから鼻で笑うくらいのゆとりを持っていた。だから、彼女が深刻そうにして帰ってこないことを想像し、そして実際帰ってきたときには未亡人のように成り果てていたのには、正直って驚いた。

「どうした？」

「かなり、堪えたわ…それにひどく疲れちゃった…スパゲティ残っているの？」

「いまから作るよ」

「じゃいらないわ、さっき病院で少し食べたから」

「Kのかみさんとか来たのか？」

「来たわ、…どうしたらいいのかしら…彼もう死んだの、それで、警察に呼ばれて、いろいろ聞かれたわ、ごめんさい、あなたのこと話したの、明日逮捕しに来るわ、出頭してくれる？自首がいいんですけど。」

「過失傷害、過失致死、殺人、どれだろう」

「無罪になってももう会えないわ」

「最後にきみを抱きたい、抱きしめたい」

夢を見た、Kの肉片をミキサーにかけ、白いビニール袋に入れ、うろうろし、竹やぶに入っていく夢だった。

翌朝早く、俺は身支度をして、逃亡を図ろうとも考えた。しかし、彼女は一睡もしないで悲しんだと思えるくらいに涙の痕が顔に刻み込まれていた。夢から覚めても、人を殺したことには変わりが無い、それは眠ったところで解決し終えたという安心感は、もう既に枯れ果てた。これで女は抱けなくなるし、酒も飲めなくなる。タバコだって制限されてしまうだろう。あんなちんけな奴と揉めなければ良かった。彼女がやめて、と叫んだときにやめていればこんなことにはならなかったのだ。それとは逆に、これから、彼女自身も警察の取調べにいや、取り調べならまだしも、家宅捜査の手が伸びて、Mについて、監禁していること

が発覚し彼女もまずくなってしまう。取り返しのつかないことをしてしまった。

「悲しいわ、あなたと話していて、楽しかったし、他にも最高な点が一杯あったのに…ねえあの雨がふっていたときにはじめてあったでしょ、あのときの曲覚えている？あなたは演歌が好きって言っていたけど、私は嫌いって言っていたの、覚えている？」

「ああ、覚えているよ、でもなんで俺が逮捕されたら、会えなくなってしまうんだい、面会に来てくれないのか？」と、男は言うが、女は名残惜しそうに話をしていた。

「なぜだい？」俺が言うと、彼女が財布から三万円出して渡した。

「こんなものいらぬよ。餞別？」

「そう、…受け取って、」

俺は受け取り、彼女が買ってくれた服を着て、オキアミ歯科医院を出た。はじめて女と交渉したときの始発列車を待つときの朝焼けを眺めているときのような、感傷的な気持ちだった。しかし、それとは裏腹の晴れ渡った空。離れの窓から厚手のカーテンはもとより、レースのカーテンもなくなり、死んだような建物の窓から老婆の姿がなくなり、俺は行方知らずの老婆になぜか親しみを抱いていた。

俺は尿意をもよおし、砂糖屋と古本屋の間に少しへこんで建っていた公衆便所に駆け込んだ。街中までできていたのだった。

小便器に向かってウールのズボンのファスナーを下ろす。取替え時の蛍光灯とアンモニア臭で目がちかちかしていたせい、その小便器に手書きで、それもおそらく書きなぐったようで、時間がなかったのか、とても汚い字で、『職安窓口』とあった。学生のいたずら書きか、と思い小便をしていると、コホコホと咳をして、

「そこに書いていませんか？窓口って…」と、小便器から掠れた、ブルースでも歌えばいいのではないか、と思わせる女性の声が出た。

「すみません、もう少しで終わるので…」といっても、なかなか止まらない黄金色の小便。疲れているのだろうか、こんな色になるなんて。

小便を済ませ、腰をかがめて、窓口といったあたりを見ると、映画館の切符売り場のようになっていた。彼女は一段下にいて、机が見えた。

「まったく、勘違いもいかげんにしてほしいわ、あなたおしっこするから、書類がびしょ濡れで、黄色くなくなってしまうわ、これは公式文書なのよ」

「すみません、公衆トイレではないんですか？」と、ファスナーを上げる。そうだ、小便をきちんと飛ばすのを忘れた。それを飛ばさないと、下着がすぐ汚れてしまうんだ。蒸れた、アンモニア臭の原因になるのだ。

「で、仕事を探しているんですね」と女がティッシュペーパーで書類をぬぐって、言った。

「いいえ、でもこんなところにハローワークがあるとは知りませんでした」

「違います、職業案内所、略して、職安、昔の職業安定所でも、ハローワークでもありません」

「でも、失業者を取り扱っているんですよね」

「そんなおしゃべりで、時間をつぶされると、困るんです、もうお昼ですし、それにあなたのせいで、あたしの好きなイタリア料理店にランチに行けなくなっちゃったじゃないのよ」

「ごめんなさい」

「これからお風呂に入らなくては…で、どんな職業をお探しですか、それから収入の希望は？」

「いいや、俺は職業よりも、家に帰らなくてはならない」

「家では家賃がかかるでしょ、仕事をして、収入がないのならば、それなりの手続きをしなくてはならないのです」と、いっているのだが、だんだん遠のいていくような声で聞き取りにくかった。

「え？」

窓口の女は首を振って、話にならない、といった仕草をした。女は旧式のパソコンを弄っていた。キーボードはなく、テンキーでもなく、昔のプッシュフォンのボタンのようなものを盛んに打っていた。音声、器械から発した。

—ガスガイシャ。マタハ、オヨビ、ガスタンクセイビ。

「それが俺の仕事なのかい？」と男が言うと、窓口の女はレシートみたいな紙切れが器械から出てくるの

を待っていた。

「ここに番号がありますので、直接電話してください」とあっけなく言うと、窓口に『隣の窓口へ』と書かれた立て札を掲げ、姿を消した。

窓口の女は、事務的でどうも虫が好かなかったものの、小便をかけられても平気なのは俺のほかにもここを職安と気付かずに、公衆便所と勘違いするものがあるのを示したものだろう。

しかし、そのガス会社とやらに俺は行かなくてはいけないのであろうか？もう一度紙切れを見る。この町ではこうした契約をなして、互いを救済するのだろうか。そうした話は聞いたためしなかった。俺はこう見えても自治体の発行するパンフレットはきちんと保存していたので、よけい気になった。自治体のパンフレットをよりによって俺が保存しておくにはわけがあるのだ。パンフレットを配りにくる女が強い香水をつけており、その女の肉感的な匂いで子供のころからなんとなく脳の片隅の埃にまみれて放っておかれている女への執着心を植え込まれたからであった。もうその女はかなりの年齢になっているので、俺の性的な対象にはならないが、母親であって、恋人であって、自己犠牲的であって、近親相姦的であって、タブーであって、他者であって、自己であって、自虐的であって、老婆に犯されているような、複雑な感情の中でその女は例の香水で俺をとことんまで駄目にしてしまうのであった。だから、俺はその女の持ってくるパンフレットをべとべと眺めているうちに大人になっていったので、女への原型は彼女がこしらえたといえる。思い起こせば、あの歯科医院の女も変わっていた。

電話をかけてみて、別に雇われることはないのだ、ただ、職安の女への義理と詫びを兼ねた電話、肩代わりの電話を試みようと思ったのである。

なかなかでない。普通のガス会社なら、ガス漏れの緊急対応も兼ねているためにすぐに、百十番くらいの速さで出るはずなのだが、もう一回コールして出なかったら切ってしまうおう、と思った。出ない。やめよう、として受話器を置こうとしたときになにやら砂浜のヤドカリのかさつくような音声が聞こえた。

「…しました。ガス屋です。なんですか、だれですか？」

それにしても気持ちの悪い電話だ。屋号がない。それに、訛っている。変な電話だ。切ってしまうおう。そして、受話器を置いた。相手を怒らせないようにするには、無言電話の場合、受話器の置き方にある。乱暴に置くと相手は怒り出す。そっと置くと、静かに置くと、相手は平然としていられる。だから、俺もそうした。だが、いっこうに鎮まらないのが、とことんまで、かけてきた相手を探るタイプである。そのガス会社の職員もそのタイプであったのであろう、受話器を置くとその電話のベルをしつこいくらいに、男が不安になり、その防御のためか、苛立ちを帯びてくるまで鳴らしてきた。男も放っておいて、逃げ出せばいいものを電話相手に喧嘩しているようなものだ。じっとしていたのだ。そして、電話に出てしまったのである。――ガス屋ですけれど、なんですか、誰ですか？いったんかけてきたものは繋がるようにできているのです、その公衆電話の番号は…

――職安に案内されたんだ。

――ハローワークですか？それとも職業案内所ですか？

――あんたが最後に言った職安のほうだ。

――では、面接がありますので、後日といってもいいのですが、期間を空けるのはすこぶる良くないので、今日これから面接をします。簡単な試験をパスするだけです。履歴書や学歴はうち関係ないんです。その点は安心できて、他の会社では考えられないでしょう、人物に関する証明書、卒業見込み証明書、卒業証明書、在学証明書、成績証明書、健康診断証明書、……………といろいろ集めないと駄目なところありますからね、エヘエヘ…で、場所ですが、今おたくさまはどちらにいますか？

――それがよく分からないのです。海を泳いで、陸に上がって、歯科医院で世話になって、そしてそこいろいろあって、いま仕事どころじゃないんですよ、まったく変な案内所だ。それから町に出て…

「いやいや参りました、まるで『およげたいやきくん』みたいですね、わが社はおたくさまのようなユニークな人材を求め、育成しておるんです。ま、とにかくこちらのほうで探しますので、しばらくそこにてくれませんか？」

電話はそれで終わった。本当にこちらとしては勤めどころではないのだ。ただ、隠れ蓑として、ガス会社に勤めることも一つの手である。しかし、彼女は自首がいいといていた。やはり自首をしたほうが罪が軽くてすむ可能性が高い。そうしようと町をぶらぶら歩いて交番を探すが、アフリカの地図を見せた交番だけには行きたくなかった。そこで、地元警察を探そうとしていると、青いランプをつけ、サイレンを鳴らす、流線型のガス会社の車がやってきた。すごい速さだ。あれでは衝突してしまう、と思っていたら、案の定中央分離帯に乗り上げタイヤが空回りしだした。それでも走り続けるぞ、といわんばかりにタイヤはくるくる高速度で回転し、それがたまにコンクリートに掠るものだから、ゴムの焦げた臭いが立ち込め、人々はハンカチを口にして通り過ぎていった。いったいどんな奴が乗っているんだろうと思っていると、ドアが開き、頭が薄い中年の男が出てきて、

「えらいことじゃ、これはこれは、乗り上げてしまったではないか！しかも中央にじゃ、そら、見てみるがいい、中央に乗り上げてしまったではないか！」と大声で、わざとらしく演技のように見えた。

男は素通りしようとしたら、スピーカーで俺の名前を呼んだ。そして、俺の格好はひどく奇妙だったためすぐに中年男の目にとまり、

「その男性、さっそく乗り込もうではないか！案内をいたす！」と、マイクで拡張された声はひび割れ、隣町まで聞こえるくらいだった。俺は車から出てきた、俺よりももっと若い男どもによって身柄を拘束されてしまい、車に乗った。ウィンド・ガラスは黒で、なぜ、どうして、この車が運転できるのかが分からなかった。ただ、冷房が効いていたため、快適であった。中年のはげた男は直射日光を浴び、俺が乗ると、すぐさま乗り込んできた。頭皮が光っていた。

「いやいや、暑いですね。もう夏至かね。ま、それはそうと、会社まで、きみ行ってくれたまえ」と運転手にいうと、運転手は、これでは前に何があるかが分からないですよ、いままで感で動いていたのと、皆が避けてくれたからできたまでだけれどもと苦情を言った。その車は文句をいいつつも進み始め、サイレンを鳴らしたために皆は避け、目くらめっぽうで走りつづけた。俺はどこにいったいこの連中は見えないで走り続けるのが怖くないのか、そして目的地がどうやって分かるのか理解できなかった。カーオーディオが備えられていて、カントリーが能天気流れていた。いくらウィンド・ガラスを黒に塗りこめたところで太陽だけはくっきりまるで天体望遠鏡で見た惑星のように光って映っていた。だから俺はこの太陽の方角でこの車は方向をкаろうじて分かるのではないであろうか、と考えたものの、草原、何も無い草原でないのだからそれではないだろう。そこで、

「どうやって会社に辿り着けるんですか」と運転手に訊いてみた。そうすると、運転手はぶつぶつ愚痴を言うかのようにいって、

「感というものです。だから私などは歩くんですよ、目隠しをして。そうして一人前になるのにかなりの時間がかかるんです。でも、よくよく考えてみると、とても会社の方針が最初のうちには理解できなかったのです。でも、それには意味がある、とわかり始めたのがつい先日です。先日社長の運転、これも黒に塗ったくったものでした。そこで、社長がこの世には目の見えない人々がいるからこの会社はその目の見えない人々が安心して運転できるようなことを副産業として開発しようということを私は聞いたのです。」

そこで、あなたに実施体験をしてもらい、それをレポートにってもらい今後の方針に役立てよう、ということなのですが、どうも私は、こう見えても銀行の重役の運転手をしていたので訳がわからず、先ほども中央分離帯に乗り上げるという運転手としては最高に恥ずかしい真似をして、つい文句をいってしまったのです。情けないものです。若い人は辛抱が足りない、と言いますが、こう私のように長くお勤めしている者でももう限界なのです。ああ、いったいどこを走っているんだろうか」

「カーナビがあるでしょ、あれで音声で知らせるのがあるから、それでいいんじゃないかな」

「なんていうことを言うんです。カーナビはベテラン運転手はつけないのが運転手としても誇りなのです。でも、社長に言ってみようかな、カーナビか、私は使わないとしても、盲目の人にはいいとね」

「でも、もう他の会社が一杯使っているから、会社独自のものを使わないと」

「そうですね、カーナビだなんて略語を使うくらいなのですからね、普及しているわけですね、問題は盲目の人に距離感をどうやって教えるか、ということですね、ま、あなたがこれから入社してがんばって開発してくださいな」

「だが、職安ではガスタンクセイビとかいっていたな」

「そうですか、でも何かのきっかけで別の部署に移されるかもしれませんね、ア、すいません、うっかりで…」

そのとき、禿げた中年男が運転手を小突いたのだ。これは俺の言うことで、運転手はただ運転だけをしていればよいというのが、この男の主張である。

どうにか会社に辿り着いた。運転手と握手をして、励まされた。禿げた男が、

「これから、会長室に向かってちょっとした説明を受けた後に、テストがあるから、それをしてから、新入社員の会社説明会に出席してもらいますからね」と、言われて、俺は頷いた。

おそらくこの工業団地の一角に設けられた巨大な敷地には大きな地球儀のような球状のガスタンクが数十個はあり、その一つがオフィスだと言う。大きすぎるくらいの西瓜のようなガスタンクの一つに俺は近付いた。入口には、警察の事件看板のような毛筆で、

ガス会社東一号棟

と書かれてあった。インクで書かれておらず、墨で書かれているために降雨の際に滲んでしまうのであろうか、一人の男が空模様をうかがっていて、手には墨壺を持っていた。そのようなことをするのだったならば、一人を係りにするのではなく、誰かが気付いた時に看板を取り込めばいいものを、ここに係りを一人設けているのであった。賃金の無駄遣いだと思った。禿げた男が案内をしてくれたのだが、そもそも俺がここに勤める謂れは無いのだから、ここではっきりと意見を固めておこうかと考えた。

「ちょっと、あの私はここに勤めるのだけしか選択が無いのですか？それにここに働く上で、ちょっとした事件を俺は引き起こしちゃったんですが」

「事件？」

「そうです、これから警察に行かなくてはいけないのです。詳細は申し上げられませんがね」

「それも会長さんに聞いてくださいいな。事件といっても重大事件で、指名手配を受けているわけじゃないでしょうね」

「そうなる可能性があるのです」

「じゃ、それも会長さんと相談してよ、俺に聞かれても判断はみな会長さんがしていることだから」と言われて、横目でちらっと女の従業員の尻を見ていたのを俺は見逃さなかった。その会長室に通じる事務所にはこの禿げた男と俺の他、男性はおらず、みな女であり、会長の趣味なのか、面長で中肉中背の画一的な女ばかりであり、さながらオットセイのハーレムを想像してしまった。長いこと事務所をぐるぐる回った。中央に会長室があるようで、それを囲むように、ゆで卵の白身のように事務所が構えられていたので



あった。

やっとのことで、会長室に着くころには、俺は情けないことに息切れをできてしまっていた。息を切らして、禿げた男に、

「分かりませんか、俺はもう息切れをしているんです、そいつがここで働けるとでもいえますか、それも訊かないとわからないですって！」

禿げた男が、会長室のドアを叩いた。中で、曇った声をして、会長がどうぞ、と言った。

会長室は暗く、暖色系の明かりをつけていたためにはっきりと会長を見ることはできなかったが、その発声がどこかで聞いたことのある声であり、そしてタキシードを着ていることで、会長があ八百屋そのものであったことに、男は驚いた。会長は、二人だけにしてくれるか、と禿げた男に言うと、禿げた男はそんな滅相もないことです、お邪魔いたしました。といい会長室を後にした。

「なかなか、ユニークな格好ではないかね」といって、男の容姿を誉めた。

「あんた、八百屋じゃないか、こんなところで何しているんだ」

「八百屋は兼業、アルバイト的なものだよ、それに…」と、暗がりからもう一人出てきた。あの糖尿病の男であった。「専務だよ」と改めて紹介されると、男はかしこまってしまい、それが変だったので、怒った口調で、二人に食って掛かった。

「おまえらのせいで、とんでもないことになってしまったんだ。人を一人殺してしまったのだ。それで、今度はガス会社の強引な勧誘だ、何だあの紹介所は、おまえたちが拵えたのにしては都合が良すぎるじゃないか！」

「言いたいことは大体分かる、こう言いたいんだろ、私らの監視下にあるのだと！」

「そうだ、俺はお前らの手のひらの上で生きているようだ」

そんな時に専務が割り込んでくるのだ、

「だが、監視にしてはあなたが生きて、体験したことはまるで万華鏡のように不思議で、自然だという気がしないか？ そうだとしたら、やはり、会長の言うとおりにこれは監視下なのだ、といえる。だが、少しでもあなたが楽しんだのならば計画のもとであっても、少しは協力してもらわなくてはならない」

「協力だと、ふざけるな、あの変な歯科医もおまえたちが用意していたものなのか？」

と、彼が突き詰めると二人は寄り添って首を振り、否定するのである。会長は、少し落ち着いたまえ、と、いった。しかし、男はそうおいそれとは落ち着いてられなかった、というのもこれから新入社員の入社説明会を開くという事務の者からの伝言をドア越しに聞いてしまったからだ。それでは何もかもがこの会長と専務が拵えた雛型の中でみなぎ動かされている気がし、動揺を隠せなかったからだ。

「いま、これからテストをする、簡単なものだ、知恵の輪を知っているか？ そうか、知っているんだな、じゃ、これを解きたまえ」と、会長は専務に顎をしゃくりあげると、専務が赤い布の包みを開き、それを男に渡した。そこには、銀の知恵の輪があり、恐ろしいくらいに単純なものであった。さっと男は解いて、はずれた知恵の輪を赤い包みにくるんで、会長に渡した。すると、会長は赤い包みを開いてまだ知恵の輪が解けていないことを示した。そうすると、男は怒って、今、解いたのを見ていたじゃないか、と怒鳴った。そうすると、会長はこう切り出した。

「ま、人を殺めたことを考慮し、解けないのだろう、しかし、安心しなさい、ここでは警察もこなければ、マスコミも来ない、出たいと思ったときには出られ、出たくないと思ったら出なくて良い、いいところだ、ここを安住の地としなさい。それが一番あなたのためだ。」

「俺はいったい何者なのだ？ それとおまえたちはなんなんだ！」

「おとといきやがれ、このうすらばか」という声がした。二人のものではなかった。

「今、なんていった？」

「何も言っていないが…」と専務と会長、なぜだかこの二人は似ていないのだが、思考方法といい、発音といい、喋り方といい瓜二つだ。確かにそう言っているのを彼らは聞いているはずなのだが、聞こえていて聞かない振りをしているのか、聞こえないかのどちらかだ。ドアが開いた。歯科医院の女だった。

「なんできみがここに出てくるんだ」

「あんたもバカよ、この人たちが協力しさえすれば、助けてくれるとっているんですもの、でも、それは法治国家の論理でいうと罪になるんだけどね、でも、もうあなたと会えないって言ったけど、こうして会えた、それをあなたったら、馬鹿もほどほどにしなさいな、あなた私の大切なクラスメートを殺しちゃうんですもの」

「本当にすまなかった…」と言いかけると、ドアが閉まってしまい、また薄ら明かりの中で会長と専務が相談しているのである。

「ま、入社式に参加しなさいな」と、二人はハモニーのように同時に言った。これでは、割った卵に黄身が2つあるようだ。

いきなり社歌を歌いだした。これでもオープニングなのだろう。伴奏にはすかさず音の出ないオルガン演奏者がいて、調子はずれな曲を流していた。

ガスタンクに合わせて奇怪なヘビのように社員は並んでいた。会長は一つのガスタンクに向かってマイクがハウリングを起こし、音が割れようが関係が無く、この音割れ現象はこの会社の特長みたいなものだ。あのガス会社の車が来たときもスピーカーが割れていたんだ。なぜよりもよって、一つのガスタンクに向かって会長が言葉を述べるのかというと、このヘビのようにクネクネと整列している社員たちに通じるように計算をして言葉、音声ガスタンクに反響し、捻じ曲がり、屈折していくことを考えているからであろう。社員はこの退屈でありあまり意味をなさない朝礼を黙って聞いていた。

「えー、これから新入社員を紹介いたします。それでは人事部長のきみ、そうきみよろしく頼む。」そうすると、演壇に俺のほか、精気のなくなった人々が整列して、人事部長が挨拶をした。

「これから、実に精鋭なる人事の匙加減によってこの世の中で一番のもぎたて一番の新入社員をわが社は受け入れることができた。このことは実に喜ばしいことなのである。実にいいことなのである。というのも、会長と専務がテストをした結果、実に滑稽な話をここで披露するとするのならば、それはあの君達も知ってのとおり、知恵の輪――この部分だけはなぜかマイクのスイッチを切って地声で話し――、あの実に単純なテストを通過できなかった連中いや、諸君だったのだ。実にこのことは滑稽である。――すると、てんぷらを揚げるような爆ぜる拍手が響いた――しかし、逆説的に言うのならば、会長と専務は――なぜか会長と専務はいっしょにされているのであった――こうした単純な昔の遊び道具を知らない者の中にこそ、秘密の宝が埋蔵されており、その埋蔵されている宝を確かなものとするのは、実に人事の部長である私の役目だと、会長と専務は語ったのである。そこで、私はいろいろ試行錯誤しいし、宝を探り出したのであった。」

一同が一斉に拍手したので、俺は他の新入社員を見たら、俺のような格好をしているのであった。一人は、デッキシューズに黒い紳士もののソックスを履き、極端に丈の詰まった、というよりも中学時代に着ていた詰襟の服を大事にとって置いたかのようにして、それを身に纏い、俺と同様短いズボンを穿いていた。

もうひとり、まるで西部時代にタイムスリップしたかのようにカーボーイの服を着ていたが、シルクハットを被っていた。どうかしている、と俺は思ったのだが、俺もおかしな格好をしているので、また紹介途中であるので何もいえなかった。

「そこで、新入社員の諸君をこれから紹介していく、まず、一番端のものは、学生時代にマクドナルドのビック・マック・ハンバーガーを毎日毎日諸君の仕事そのものだね、一週間で、60個食べた結果体重が十キログラム上がり、その他に、甘いペットボトルの、なぜ清涼飲料水だなどと言うのか知らないが、一一ここで人事部長は妖しくにたにた笑った顔を社員に振りまくのであるが、誰一人して笑わなかった一一それを毎日毎日飲んでとうとう糖尿病になってしまい、そのことを医者に告げると医者は匙を投げた…次の者であるが、彼は、もとは寺の出である。坊主を志そうと思わずに悪さを散々働いたものである。しかし、彼には独特の能力があった。彼の記憶力である。そこで、会長と専務はお経を知っているか、というが、彼は夜の店の住所と女の名を全て暗記しているのだけであつた。そして、路上で捕獲…次のものは、」

結局のところ、ここにいる連中は俺と同じくこの世の中で必要としないもの達だったのである。次々に紹介していくが、全て人生の落伍者であつた。女と心中を図り、自分だけ助かった者、犬の尻を噛んでけがさせた者、マスコミを偽って轢断死体の写真を収集している者、中学校の教師で生徒にSM調教を放課後強要して首になったもの、スカトロジー、障害者を性的対象としていた者、ロリコンで捕まった阿呆、浮浪者、露出狂、出歯亀、獣姦者、そして、俺は人殺しということを会長と専務は伏せておくことにしていたらしく、魚から変身したもの、として紹介された。俺は紹介が終わって、皆が一斉に歓迎の歌を歌いだし、寒気がした。そして、会長である八百屋が俺に小さな声で、歌が終わったら会長室に来ること、といわれた。

俺は正直いって、あの息切れのする、異様に長く感じる、会長室に辿り着くまでの事務所、巨大な事務所が嫌いだつた。だが、こうして、組織に所属した限りではどうにもわがままはおらない。そこで、俺は疲れた体で、どうにか会長室に辿り着いた。ノックしたら、会長と専務がまたハモるように、どうぞ中へ、といった。

「いったいどんな連中がここには集まっているんだ！みな日陰者ではないか。」

「まあ、まあ、その辺で、差別になりますよ、こう言ってはなんだか、君は自分の事を棚上げにしているようだ。自分もじゅうぶん日陰者ですとも。人殺しはね。」しばらく、会長は黙っていた。そして、その間、専務は団扇で会長を扇いであげているのである。そして、会長が、口を開いた。

「いやね、この組織にはきちんとした目的があるのだよ、その目的というのはだね、ガス会社という都市のライフラインを握るものをこの世で必要としないものによって制御し、都市を壊滅することができるという考えのもとで活動している危険な機関なのだ、ということだ。公安も気付いちゃいない。しかし、まとめるのがこれは厄介なんだ、つわものぞろいだからな、だが、組織というものは、目的をいちいち説明し、納得させた上で何事も行なうこと、これはあたりまえのように見えて、実は難しい。さっきも言ったように、この組織は危険なものだが、まとめるまでに時間がかかるんだ、まとまったときを夢見て、私と専務は日夜努力を重ねている。日々努力。さっき、きみは彼ら、ま、うちの連中、社員も含めてか知らないが、日陰者といっていたが、仕事に関しては、鍛えてやれば普通にこなす。だが、趣向までは制御できない。

私は、この組織の者どもは、宝の山ではないだろうか、と考えている。人事部長が言っていたね、そのとおりだ。なぜ宝の山というのかは、天才というものが、精神を病むか病まないかの瀬戸際で登場してくることに似通っているんだ。社会が受け入れない、あるいは、社会から逸脱したもの、それは社会的な適合に対しての能力が病んでいるか、病んでいないかの瀬戸際にあると考えられ、とどのつまり、社会的天才とも言える、だから、私は宝の山だ、とっているのである。こうした連中はある方向付けをしてあげれば、私の思い描くままの世界を展開してくれる。これが、待てば海路の日和あり、というものだ。きみはその辺を気にしていたか？それともなければ、俺は違うと思っていたか？だとするならば、私と専務ときみである団地で話し合ったときに渡そうとした手紙の送り主が、この組織だということを理解できるだろうな。できない！きみには失望した。さあ、専務、こいつを追っ払ってしまえ！もう私の部屋にはつれてくるな、私の機嫌が治ったら連れに誰かを遣ろう、それまでは、仕事を叩き込み、そして、この組織に順応させ、ものにしておけ。」と、会長は不機嫌な顔をして、回転イスを回し、背を向け、社訓をカッカと音読をして、専務が団扇を机において、ドアを開けた。専務に促される前に俺は既に外に出ていた。事務員の中にどう見ても小学生の女の子がいた。どこかで見たように思えたが、思い出そうとすると専務が、

「会長さんを怒らしたら駄目です、どういうことか説明、一生懸命あなたのいい方向に導こうとしているんですから、すっかりあなたのことをお考えになられて、やつれていらっしゃるんですよ、それをあなたときたら、聞いているんですか？」

「俺、あの女の子知っているよ」

「え、誰です？」と訊いてきたので、俺は指を差して、コピー機の操作を背伸びしてがんばっている女の子を教えた。その女の子の足元にはウサギのぬいぐるみがあった。

「あの子は万引きの常習犯で、もう処女じゃないものです。」と、言ったので、俺は瞬く間に怒り狂い、専務を無惨にも殴り殺すところだった。女の事務員が、数人で押さえ込み、俺はしばらく気を失った。というのも、その事務員の中に柔道をやっている奴がいたらしく、俺はそいつに絞め技をかけられたのだった。

地下鉄の終着駅に向かう列車の中で、乗客は誰一人としていない。俺一人だけだった。窓はツララが垂れ下がっていた。凍てつく寒さか、というところでもない。暖房のあたたかさも感じない。アナウンスもなく到着した駅名は「南極」。看板も駅名もみな凍り果てていた。列車も凍っていた。なのに、俺は寒さも、暑さも感じなかった。

起き上がろうとしても酸欠状態だったらしく、体はしばらく動かなかった。がやがや人の声がした。誰かが覗き込んだ。

「おい、起きたぞ！」と叫んだ。人々は俺の周りに集まりだした。ソファの上だったらしく、体を捻じ曲げると落ちてしまった。そして、生まれて間もない牛か馬のように俺はよろよろと起き上がるが、くらくらしてまた倒れた。誰かが、支えてくれた。ありがとう、と俺は礼を言った。そうすると、社宅のロビーだということが知れた。支えてくれた人が、

「ガス会社、その社宅ですよ」と教えた。

「なんだって！まだ俺はガス会社にいるのか？ということ、俺はまだ…」、と喋り言葉を濁した。人殺しのままだと、言いたかったのだが、口を滑らすところだった。俺は急に泣き出した。そして、

「誰か、警察を呼んでくれ！」と大きな声でヒステリックに叫んだらしく、一同はしんと静まり返った。涙は止まらなかった。こうして何年、いや一生ここにいるのかと考えるだけで気が狂いそうだった。

まだ、人殺しで、数年で出てきたほうがましだと思った。向こうは犯罪者でも、その外にはきちんとした社会がある。ここはどう見ても、ガス会社を偽った裏の世界だ。最果ての、俺が夢うつつで見た「南極」の世界だ。

ロビーのテレビには、エベレスト登山隊のドキュメントをやっていた。皆が見ていた。俺は涙で情けないくらいにくしゃくしゃに崩れた顔をして、滲んだ画面を見ていた。

「リュックサックと竹ざお、これは植村直己さんのアイデアなんですよ…クレバスに落ちないように…」画面は次第に吹雪で白一色になる。雪崩だ、と誰かが言った。すると、画面の映像にひびと、壊れるビデオの狂った電気信号が入り、しばらく黒一色になってしまった。次の場面になったとき、俺は諦めた。テレビでは、霊安室が映し出されていた。そこには、黒いビニールでできた遺体を包む袋がクローズ・アップされた。ナレーションが入った。

〈常識から逸脱したとき、そうエベレスト登山隊のAのように…人間はネズミとのあいの子になる。〉

遺体袋のチャックを開いた。そうすると、中は傷を何度もこすりすけたような、真っ黒な毛のような、樹脂でできた全身、真っ赤な引きつった細長い目、そして、前歯が肥大化した、ネズミと人間のあいの子が、テレビ画面に大きく映し出された。

俺は大声で半ば、きちがいじみて笑い叫んだ。誰かが、俺に何かを言っていたようだ、そんなことはまた先のことだ、これからじっくり話し合おうではないか。そうだ、これからなのだ、これから俺は一仕事するのだ。さ、見ている、俺は意気地なしでも、日陰者でもない、だから他人がどう言おうが俺は気にしない。俺はただ、今映っている画面がなにやら、俺の行き着く先を暗示しているようにしか思えない。そこで、俺は大声で神経がぷつりと千切れたように笑う。それでいい、それでいい。もうこの世には未練などない。どうなっても構わん。所詮ネズミ魚は人間社会でも拒絶されるのであり、俺はまんまとそのどつぼに嵌まった、滑稽な魚、歯科医がこの世の案内者、フォッグライト。その娑婆の味を堪能したネズミ魚は最果ての地で死を迎えるしかないのだろう。だとするのならば、この就職の決まったガス会社、犯罪者であろうと、倒錯した異常者でもなんでも遣って来ては、仕事を与える、あの寛大な八百屋である会長のもと、俺以外のものでも似たりよつたりの社員、新入社員、皆が精を出し、そして、会長が思うところに皆を運んでいき、俺も間違いなく運ばれ、そして、世界が変わる。この革命じみた、荒唐無稽な会長の論理を覆す者達はいまだにこの世には存在しない。ここで、俺が一役かって、外界にこうした危険な機関があることを知らしめたところで、世の人々はネズミ魚の話などは少しも信じてはくれないだろう。先にも言ったように、この世では社会から拒絶されるのがおちというものなのだから。